

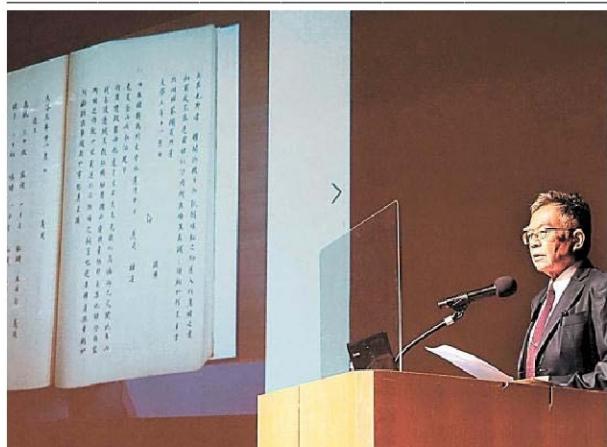
徳川時代の歴史的意義を研究、発信する
川みらい学会は19日、
本年度の第2回講演会
(静岡商工会議所共催)

朝鮮通信使 史料から説く

徳川みらい学会が講演会

静岡

井章介東大名誉教授が、江戸時代に朝鮮から日本へ派遣された朝



史料に基づき朝鮮通信使の位置付けを語る
村井東大名誉教授=静岡市葵区

鮮通信使をテーマに講演した。

村井名誉教授は九州と朝鮮半島の間にある対馬(長崎県)の立ち位置に着目。朝鮮との交易で利益を得ていた対馬の支配層が、幕府の文書を偽造して朝鮮に送ったり、禁止された鉄砲の輸出をする代わりに朝鮮人参(にんじん)を輸入していたりした江戸時代初期の史料を示した。対馬と朝鮮の生々しいやりとりを踏まえて、日朝関係に「対馬の意向が大きくなるでいた」と説

朝鮮通信使については全12回のうち、江戸時代初期の1~3回は性格が異なり、対馬勢力の意向が色濃く反映された「多重外交だった」と指摘。1630年代の対馬支配層の内紛「柳川一件」を契機に幕府が対馬への関与を強めたとし「日々われわれがイメージする朝鮮通信使はその後姿だ」と説明し